

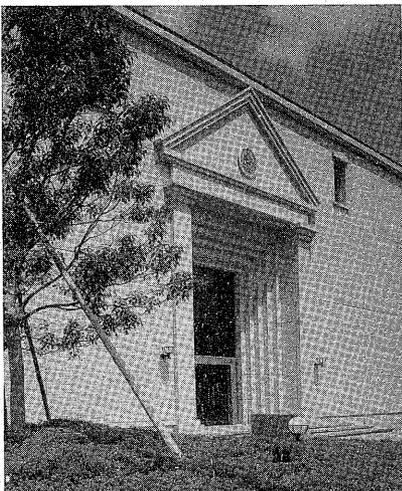
東京ゲート記念館

近くを都電荒川線が走る、北区西ヶ原に「東京ゲート記念館」はある。

ゲートに関するあらゆる資料を完全に集め、永遠に保存し、公開することを目標に、蔵書7万冊、附属資料15万点、文献カード160万枚以上を擁する資料館である。

館長の粉川忠氏は現在81歳。18歳の時に読んだ「ファウスト」をきっかけに、ゲートに魅せられ、ゲート文献の徹底収集を始める。収集資料は、単行文・雑誌・新聞をはじめ、ゲートの戯曲の上演にかかわる資料（台本、写真、ビデオ、チケット、etc.）、講演会や展覧会の資料、またゲートに影響を受けた人々の談話、書簡と、とにかく「ゲート」のひとつが付されている、何でもが収集の対象になるという徹底ぶりである。

それらの資料は、粉川氏独自のゲート十進分類表により区分されている。



また1冊の本から20～750枚の文献カードが作られ、あらゆる角度からの検索を可能にしている。

展示室では、所蔵資料の中からいろいろなテーマで常時展示会が行われているが、今は、「日本におけるゲート劇の回顧展」と題して、俳優座及びブーク人形劇団による「ファウスト」、東宝公演「若きウェルテルの悲しみ」上演に関する1万点にもものぼる資料が公開されている（'89.5.31まで）。

粉川氏は、自分が生きている間に出されたゲートに関する文献はすべて集めたい、空白は作れない、と語られる。毎週日曜日には、1日かけて神田の大きな書店をすみからすみまで見て、おびただしい数の出版物にうずもれている「ゲート」の文字を捜す。昼食も抜きで10時から7時まで、1日に3冊くらいは見つかりませんが、とこともなげに言われる。ドイツからの招待も18回を数えるが、一度も行ったことはない。留守をしている間、資料収集が滞ってしまう、その時間をもったいないから。1日4時間の睡眠時間と食事などの時間を除いて、粉川氏の生活はすべてこの資料館の仕事にあてられている。そういった日常を淡々と語られる粉川氏の姿は、感動的でさえある。

資料収集にかける熱意、そして集めた資料を100%生かすための文献カードの作成と、どれをとってみても、図書館に働く者として、圧倒されっぱなしの粉川氏であり、ゲート記念館であった。

1988.11.9訪問

(参考課 伊佐香代子)